
短編集『ぬかにクギは打てない』

ジェイのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集『ぬかにクギは打てない』

【NNコード】

N1808E

【作者名】

ジョイのすけ

【あらすじ】

ぬかにクギなんか打てるの？ だってさ、このぬか床の中に、錆びたクギが入っているよ。

茄子のぬか漬けの色を良くするために入れた釘は、決して打ち付けるためにぬか床入れたのではないであります。ほら、「人間いたるところに青山あり」なんて言うじゃございませんか。そんな事は分かつちやいるけど、理想の場所へ行き着かないと死んでも死に切れないのかい？ いつも肩の力を抜いて生きてみるのもようござん

しょ。遊び心を忘れた旅路はつらいだけじゃありませんよ。

『凶悪のセオリー』

『凶悪のセオリー』

「ただいま」

コウジは学校から帰ると、玄関先で、すぐさま郵便受けを確かめた。

「やつぱりないか……」

彼は、空っぽの郵便受けの中身を見て、うな垂れながら残念そうにつぶやく。

すると、コウジの兄タカノリが、二三二三ながらコウジを迎えた。

「おっ！　お帰りコウジ。……おい、どうしたんだ？　郵便受けなんか覗いつちやつて」

「うん……。クラスの友達の柚依菜ちゃんから、誕生日プレゼントが届いてないかなあって確認したんだ」

「そうがあ、朝からずっと家にいるなど郵便なんて何も届いてなかつたぞ。しかし、今びきプレゼントを郵便で送る女の子なんているのか？」

「おかしいなあ、柚依菜ちゃん、ボクの誕生日にクッキーを焼いて送ってくれるつていってたんだけどなあ～」

「そうか……と、タカノリは神妙な顔つきで答える。そして熱い眼差しで見つめながら、

「泣くな弟よ。しかし残念だつたな。でもお前はまだ中学生だ。まだまだチャンスはいくらもある。兄ちゃんは陰ながら応援するぞ！」

兄タカノリはやつこつて、ガツクリとつな垂れている弟を元気付けた。

すると、弟ユウジはその言葉に感動し、子犬のよつに瞳を潤ませながら、

「兄ちゃん！」

「ユウジ！」

一人は玄関で涙ながらに抱き合つた。まさに熱い兄弟愛である。

その時、ユウジは思った。兄ちゃんからいいくいがする　と。

兄タカノリは、より熱い眼差しを向けて言った。

「どうせそんな薄情な女の焼いたクッキーなんてマズイに決まってるよ」

すると、

「……そ、そうだよね。あ、あ、あんな薄情でぺったんこな女の焼いたクッキーなんてマズイに決まってるよね」

ユウジもやけくそになつて、兄の暴言に呼応する。

「そうだとも！　そんな女の事は忘れる。ああ叫べ、あの夕口に向かつて！」

「分かつたよ、兄ちゃん！」

二人は玄関から覗く赤いものに向かつて、腹の底から熱く込みあがつてくるものを吐き出すように、

「柚依菜の、バツキヤローッ！」

「柚依菜のぺつたん」——「！」

ど、やつたものだ。その一人の怒声は、家々が建ち並ぶ密集地帯を、「じとじ」とく搖るがすほどのものであつた。

そして、熱い眼差しをした兄弟たちは、それを言い切つた後も余韻を楽しむかのように、玄関先で立ち尽くしている。

「あースッキリした。兄ちゃんありがとう！」

「いや、礼には及ばん。俺は兄として当然の事をしたまでさ。分かるか弟よ…」

ヒシッ……そう聞こえるほど勢いで、再び兄弟は抱き合つた。

まさに、熱い兄弟愛である。

だが、しかし、その時に、ユウジは素朴な疑問を兄に投げかける。

「ねえ、兄ちゃん？」

「何だ、弟よ」

兄は、怪訝な顔つきで弟を見る。

「さつきから兄ちゃん、とつてもいい匂いがするんだけど、一体なんの匂い？」

弟の、まだ幼さの残る表情に、兄はまるで何を感じるでもなく答えた。

「ああこれが。これはな、昼間に『シロクロ猫の宅配便』で届いた“ビスケット”の香りだ。なんだかあんまり旨くなかったな。時期外れにお歳暮とは呆れてものが言えん。差出人はかなりの常識外れなんだろ？ あれ？ まだ匂ってるか？ やだなあ、この服今日おろしたてのお二ユーナんだぜ」

「…………」

兄タカノリの、あまりの傍若無人振りに、コウジは言葉なくその場に崩れるように、へたりと倒れこんだのである。

それでも彼らは、血を分けた兄弟である。弟ユウジとて、兄の傍若無人振りに多少の免疫はある。

ユウジはめげずに、眼前の魔人兄の顔色を窺いつつ、

「それよりさ、兄ちゃん！ 今日ボク誕生日なんだぜ！ プレゼントないの？……あつ、ゴメン。兄ちゃん今失業中なんだよね。それ確か『二ート』っていうんだっけ？」

とそういうつて、まだ幼さの残る少年特有の眼差しで話し掛けるのであった。

それを受けた兄タカノリは、まるで平然とした面持ちで、その質問に答えるのだ。「ハ、ハ、ハ、こいつは手厳しいや……。違うんだよユウジ。兄ちゃんはちょっと腐れ切った今の社会に嫌気が差して、自らお休みを貰っているだけなんだよ」

ユウジは、兄の、あまりに悪びれた風もない素振りに、妙な苛立ちを覚え、

「へえー、いいなあ大人つて。ボクなんてまだ中学生だから休む時はママに言つてからじゃないとダメだもんないよ」

と、精一杯の悪意を含んだ嫌味というものを言つたものだ。

すると、兄タカノリは、弟の真意を知つてか知らずか、また、魔人言葉を放つのだ。

「ハ、ハ、ハ、ハッ！　ユウジも早く大人になれ。大人はいいぞ！」

兄の表情は真顔だった。

「…………」

当然、弟ユウジは崩れ落ちた。この日、一度目である。

「じゃあ、兄ちゃんにプレゼント期待するのはちょっと罪だよね」
しかし、ユウジはめげなかつた。まだ、この魔人兄に立ち向かうのである。今どきの少年にしては、見上げた根性である。
が、しかし、

「何を言つてるんだユウジ！　この兄をバカにするなよ」

兄とて、引けを取るものではない。何せ、この男、これが普通なのである。並々ならぬ男、なのである。

とはいって、弟ユウジとて、負けてばかりはいられない。彼はこそとばかり、今までに思いついた激しい攻撃の手をやめるつもりはないのである。

「じゃ、兄ちゃん。プレゼントあるの？」

弟ユウジは、激しい攻撃を放つた

それは、夕暮れのゆつたりとした流れを、極寒のツンドラ地帯の猛吹雪に変えてしまつよつた勢いがあつた。稀に見る強烈な一撃である。

相手は無職である。しかも職歴はおろか、何一つ自ら給金稼いだという記憶がない男なのである。失業中とは名ばかりで、汗水、

涙水を一粒たりとも、流した事ない男なのである。

通常の一般人であるならば、頭をもたげ、膝を付き、地獄の亡者のような呻き声を上げて転げまわるほどに、いたたまれなくなるものである。

がしかし……。

兄タカノリは、そうではなかつた。どうじつ思考回路をしているのか定かではないが、まるでエサをもらひ寸前の小鹿のように、意氣揚々と丸い双眸そうぼうを潤ませながら、

「ああ、あるとも！……しかしながら、先立つものがいいのだ。だから行動で示してやつたぞ！」

と、を返したものだ。どこからともなく、高原をゆるやかに駆け抜ける爽やかな風がコウジの頬をなでまわす。カツコウが啼いている。

コウジは驚いた。愕然とした。どこにそんな自信あるといふの？ どこからそんな考えが湧いてくるの？ そんな言葉が、彼の脳裏を過ぎる。

恐ろしいほどの兄の言動に、彼は身震いしたが、さすがに怖い物見たさも相まって、次を問いただすしかない。

「行動？」

そういうて、コウジは切り出した。いや、そう切り出すしかなかつたのだ。

すると兄は、これまでと同じよつこ、当然の如く、満面の笑みで言い放つのだ。

「ああ。お前は以前から困つてゐる事があるつて言つていただろ。やつておいてやつたぞ！」

兄は、コウジの肩をぽんと叩いた。まるで邪気が感じられない。コウジは恐る恐る……、

「う、うれしいな……。ところで何をやつてくれたの？」

聞きたくはないが、聞いてみた。

それを受け、兄タカノリは、まるで天下を取つた武将のような

勢いで言い放つたものだ。

「ああ、お前がやりあぐねていた『ドラドラ・クエスト9』のドラ
ドラの紋章見つけといた。ああ、ついでに完全クリアしといてあげ
たぞ！ 喜べ！」

「…………」

ゴウジは崩れ落ちた。この日、三度目である。そして彼は、一度
と立ち上がる事が出来なかつたのである。

悪のセオリー』 了

凶

『グラスハートな彼女』（前書き）

ふざけた口調の地の文は、2008年の春に亡くなられた名優『広川太一郎』さんをイメージして書いたものです。

広川さんをご存知の方は、そんなイメージで読んで頂けると、ボクちゃん幸せだったりなんかしちゃつたりして。そののもいいんですね！

『グラスハートな彼女』

『グラスハートな彼女』

みんな、聞いてくれ！

俺はさ。今現在、大変な危機に陥っちゃってるわけ。

「一体どうやって、この危機から脱出来るのさ？」

なーんて、そればっかり考えているところなんだけどさ、まるでいい案が思い浮かばないわけなのよ。もう、まるでダメ男。だから、これを読んでいるアンタたち！ 俺の力になつてちょうだい！

ま、事情は、一から話さないと解からないだらうから、まずは、俺の身の上話から聞いてくれ！

そのくらい、いいだろ？

俺さ。最近この町に引っ越してきたばかりなんだけどさ。すんごい良かつたと思えることが、二つあるわけ。

先ず一つめは、俺のアパートの窓から海が見えること。
都心から列車に揺られて一時間半の物件なんだけど、これがすんごい良い所でさ。六畳一間のフローリングのアパートの窓から南方角を覗き込んだりするとさ。緑色の芝生が一面に広がる、もうこれでもかつてぐらぐら、だだつ広い『緑地公園』が見えてさ。その公園のもつと向こう側なんか覗き込んでじやうと、もつともつと、だだつ広い壮大な大海原と水平線が待ち受けちゃつているわけ。な、な、すごいだろ。すごいだろ。

もう、なんつーの。すんごい贅沢？ すんごい幸せ？

ちょっと前まではさ、都心近くの密集地帯に、赤茶色の触覚の生えた小人たちがうようよ徘徊する小汚いアパートなんかを借りていたわけなんだけどさ。ほら、なんて言ったつけ？ あのカーネルナ

ントカおじさんを使うチキンの名前？ そういう、そのブロイラーみたいな生活に飽き飽きしちゃってさ。そこでこっちの海側の、のびのびとした町に引越しして来たつてわけなのよ。

ちょっと前まではさ。都会人気取りでさ。いろんな有名ビルの街なんかを散策をしてみたりしてさ。ほら、金色のうん みたいなオブジェが乗っかつてるビルとかがあるだろ？ あと“どぜう”とかいうによろによろした物を食わしてくれる、橋のたもとの古いぽい店とかあるだろ？ そんなふうに、あの街のあいつた店のメニューが旨いだと御託を並べ立てちゃつたりしていたわけなんだけどさ。もとをたとれば、俺もかなりの田舎者なんだよね。空気がまじー（マズイ）所になんかさ、そう長々といられないつづーのもつ都會人面してごまかして生きていいくのはゴメンしたいわけなよ。

そうそう。たまに携帯電話にかかる田舎の友達なんかに、「ヒルズつてさあ、響きがいいよねー」

とかなんとか言つてみちやつたりしてたわけなんだけどさ。過去の俺。

ばすかしー！ アホかつての。ちやうんぼうんな社会人の俺なんかにはまったく関係ないのにねえ。

そんな田舎育ちの俺がさ。海の見える郊外の町に引越しして来たつてわけ。うーん、もう最高なわけよ。

そして二つ目。

そう、この二つ目が大切なわけ。これがもっと最高！ ホント幸せな俺。

俺はこの郊外の町に引っ越してきて、ある女の子と知り合つたわけよ。おいおい、女の子って言つても女子大生だぜ。カン違いすんなよ、この犯罪者！ このすつとこどつこいー。

そう。つまりそういうこと。俺に飛びつきりの彼女が出来ちゃつたつてわけなのよ。これが。

そりゃあ、社会人一年生となつたこの歳でさ。彼女が出来た事を、人生の一大事のようにはしゃぐのはみつともないんだけどさ。やっぱりこれが、俺にとつての一大事というわけなんだわな。

えつ？ なにがそんなに一大事かつて？

それがね、手前味噌で申しわけないんだけどさ…… その彼女、かなりのカワイイ口ちゃんなわけ。もうすんげーかわいいの。よく小説なんかのたとえで、『田の覚めるような美人』なんて言い回しがあるだろ。言つちゃあなんだけど、俺の彼女はそんなふうな言い方がズバズバ当てはまっちゃう、田の覚めるようなカワイイ口ちゃんなわけ。

これ読んでる人、みんな小説とか好きなんだろ。だつたら俺が書いたものを読んで聞かせるよ。

えつ？ 何をだつて？

決まつてんだろ。詩だよ。詩。ポエム。彼女の素晴しさを称えるポエムのことだよ。贊美歌ともいうのかな？ 本物の贊美歌とかは歌つたことないけど。

えつ？ 何？ 今度でいい？

そうか。それは残念だな。結構自身あつたんだけどな。まあいいや。それは今度さ、コンビニ行くついでに直木賞にでも送つとくからさ。まあいいや。

とまあ、そんなことはおいといへさ。

前置きが長くなつたけどさ。俺は今日、そんな可愛くつて優しくつてパーfectに近い彼女とデートの待ち合わせをしていくわけよ。俺のアパートから五分ぐらい歩いた所にある、紅茶のおいしい喫茶店なんだけどさ。そうそう、店の前で茶トラ模様の猫が「いらっしゃ～いにゃ～ん」とか鳴いて出迎えてくれる店なんだけどさ。

「いらっしゃ～いにゃ～ん

だぜ。

ほら、アンタも想像してみなよ。すつ～い可愛いだろ？ そんな感じでさ。かなりイカしてるだろ？

「この選挙前の政治家みたいに、かなり愛想のいい猫の名前が、ブクちゃんって言つただけどさ。」これがまた彼女のすんごいお気に入りでさ。緑地公園でデートする時とかの待ち合わせ場所はいつもこじ。このサテンってわけなの。まさに一人にとっての愛の招き猫つていうわけなのよ。

でもさ。そんな可愛くつて心優しくつてパーフェクトに近い彼女なわけなんだけどさ。ここだけの話、一つだけ欠点があるわけなよ。

それはね

とつても傷つきやすいこと。

わかるだろ。心のことだぜ。内面のことだぜ。うーん、ハートブレイク。つまりハート。ハートが無茶苦茶纖細なわけよ。もうシャンパングラスの端っこみたいにもろくわ。彼氏の俺としてもすんごい大変なわけよ。

「この間もさ、俺のアパートに飯作りに来てくれたわけよ。むへへ。そうよ。もう俺たちはそういう関係なわけだけど……

彼女つてばさ、料理が得意でさ。その晩のメニューは和食中心だったわけ。

揚げ出し豆腐にきゅうりのお漬物。出し巻き卵に焼き魚。シジミの味噌汁。イカとねぎと若布の、ぬた和えなんかもあつたつけ。あれはホントにうまかった。心までがとろけそうになつたよ。

でもさ。俺が、つい口にしたあの一言がいけなかつたわけなのさ

「本格的な出し巻き卵もいいけどさ。弁当とかに入つてる甘~い卵焼きとかもおいしいよね」

とか、言つちゃつたりしたらさ。彼女、突然立ち上がり南側の窓の方へ駆け出しつつしゃつてや。ブランドからピローンつてな感じで飛び降りちゃつたつてわけ。

そう、その通り。自殺だよ。自殺。何氣ない一言に傷ついたやつ

て、南側の窓から飛び出して、俺の田の前で、いきなり飛び降り自殺を図つちゃつたってわけ。これがアンタ、驚かないでいられますかつての！

でもさ。彼女、全然怪我なくて無事だったわけ。えつ、なんで？そりやさ。俺の部屋が一階だからだよ。高さなんかぜ～んぜんなかったの。アパートの田の前に広がってる、緑地公園の芝生の上に「テーン！」とかいっしゃつたりして、単に寝そべっていたってわけ。まるで坂本竜馬の死に際みたいにさ、前のめりになつて突つ伏した状態になつちゃつたりしてさ。白いワンピースのスカートの部分が全部めぐれ上がつちゃつたりしてさ。お尻丸出し、なんてわけ。な、な、おかしいだろ？

でさ、彼女そのまんまの姿でしばらく恥ずかしくつて動かなくなつちゃつたのよ。ね、ね、可愛いだろ？

そんな感じでさ、付き合つて以来さ、俺のマイスイート彼女つたら、傷つくたんびに自殺未遂を図つちゃつたりしちゃうわけ。もうホント、大変なんだから。こつちは。

招き猫のブクちゃんの頭を撫でながら、その喫茶店に入るとさ。そんなスイートな彼女が、俺の来るのを首を長くして待つてくれちゃつたりしてるわけなんだけじさ。今日も彼女は、飛びつきり可愛いわけなのよ。

もう薄桃色のセーターなんか着ちやつたりしてさ。髪を後頭部で一まとめにしちやつたりなんかしてさ。真ん丸い瞳なんかを、

「キラキラ～」

とか、させちやつたりなんかしてさ。

「こつちよ」

とかなんとか、手を挙げてきちやつたりするわけよ。うーん、ボクちゃんもう最高だわ！

でもさ。俺ヤ……

一つまことに気が付いたやつなんだわな……

実はさ。こんなこと、他人に話すのもなんなんだけどさ。今、ヒラヒラ、ヒラヒラ、とか揺れる物体を発見しちゃったんだな、これが。

え？ なにそれって？

ほら、よく教科書とかのえら~い人の鼻の下辺りに、黒い鉛筆で一本線なんか引いやつたりしたことあんただろ？ 社会の授業が退屈で、なんとなくいたずら書きなんかしたことあんただろ？ あれだよあれ。

そんなこまかーい黒い線のようなものが、彼女の可愛らしきお鼻の片方の穴から、ヒラヒラと舞い踊つちゃつたりしちゃつてるわけなのよ。

これがもう、飲み物なんかをストローで吸つちゃつたりすると、余計に伸びて出てきちゃうわけなのよ。彼女の顔が可愛らしく見えるから、ひどく悲惨に見えてしまうわけなのよ。

もうホント、どうして鼻毛つて急に伸びてくるものなのかな。

ねえ、俺はこれからどうしたらいいと思つ?

ねえ、俺はどうやってこの場面を切り抜けたらいいの?

これを読んじでるそこの人あなた！ あなたの意見を是非聞かせてちょうだい！

もう気分は、時間よ『とまれ…』ってな感じだよね。

『恩知らずでない猫』（前書き）

この物語は童話です。携帯用にと台詞のみで構成しました。

アザラシのモデルは『タマちゃん』。そして猫のオリヤくんのモデルは、もう十年前ぐらいに少ない休みを利用して当てのないロングドライブ（気ままな旅）をしていた時に出会った、河原の一匹の白い子猫です。

ひと氣のない河原で友人と野宿していると、ひとなつっこく寄ってきて晩酌の相手をしてくれました。いたずらにビールを舐めさせたら、びっくりして他の酒瓶をひっくり返して飛んで逃げていったつけ。

でも、またけろっとした表情で戻ってきて。

だれも立ち寄らない閑散とした田舎町の河原での出来事。
そんな猫目線のシンプルな物語です。

『恩知らずでない猫』

童話『恩知らずでない猫』

はくちゃん！ ブルブルブル……。

オリヤはネコだにゃん。この河原に住むチジネコだにゃん。
なまえ？ なまえってこにゃんだそれ。食べられるこにゃん？

オリヤはいま、たべものを探してるこにゃん。オリヤはいつでも腹ペコだにゃん。だまつてたつてだれも食べ物なんか運んできてくれないこにゃん。だから自分でさがすこにゃん。

でも、食べ物なんてなかなか落ちてないこにゃん。落ちてたつて、カラスのクロ公達が持つて行つてしまつこにゃん。せつかく“後ろ足で歩く生き物”がそじらじゅうにおいて行つてくれる食べ物も、かたづばしから持つて行つてしまつこにゃん。

ウ~。お腹すいたこにゃん。フラフラだにゃん……。

それにしても、最近やたらこの河原に“後ろ足で歩く生き物”が増えたこにゃん。

きっと“アイツ”のせこだにゃん。

アイツはいつも三の中こにゃん。

水の中っこによく平気だ。 もん。

オリヤは水が苦手だからそんけこあるもん。

だけどアイシも独りぼっちだ。 もん。

さみしちゃだ。 もん。

あれ？

そういえば、オリヤも独りだったに。 もん。 オリヤは気が付いたら
独りぼっちだつたに。 もん。

でも、それが普通だから気がしてない。 もん。

淋しくなんてない。 もん……。

……でも、アイシはこつも淋しいだ。 もん。

三の舟からこいつをひきつけひきぬ。 もん

“後ろ足で歩く生き物”はアイシがかなしそうな顔をしていて
を見ると、みんなよろこぶ。 もん。

“後ろ足で歩く生き物”は田舎っこだと増えっこくもん。

おかげでオリヤまたべものが食べらるよつた。 もん。

あつとアーティッシュのおかげだ。 もん。

「これなら腹ペコにならないにゃん。」

カンシャだにやん……。

う？ まだあるんだよ！

「ウフフ…… こんにちは、カワイイ猫ちゃん！」

……。 “後ろ足で歩く生き物” に捕まってしまったにゃん……。 “はなせにゃん！ ふ、不覚だ

「あらあら、そんなに暴れないで……。大丈夫よ、大丈夫。なでな
でしてあげるから」

うにやあ？ そなにやん？ ホントにダイジョウブなにやん？ 信用できないにやん……。オリヤを取つて食べたりしないのにやん？

「大丈夫よ、食べたりしないから」

にやん?
おまえ、オリヤのことばが分かるにやん?

「いいえ、分からぬわよ。でもなんとなく分かるのよ。猫ちゃん」

「いやんだあ？ 変なやつだにゃあ。でも……おまえここのオイが
するにゃん。にゃんだかなつかしい一ホイがするだにゃん。ネムネ
ムだ……」にゃん。

「あらあら、よつまどおねむだつだのね。気持ちよれやう。……」

„גַּדְגַּדְ... גַּדְגַּדְ... שֶׁ הָיוֹ

「おーい！ 悠里！ 悠里つたら…！ もうつどに行つちゃつたのかと思ったわよ。なあに？ その薄汚れた猫……。やだあ悠里つたら、また猫なんか相手しちゃつてさ。もうつー。今日はこっちじやないでしょ。わざわざこんな所まで足を運んで来たんだから、猫なんて放つておこてあつち見に行こうよー！」

「あらあら、渚ちゃん。もう少しだけいさせてくれる?」

「もうひー・もうひー！ 悠里つたらー 猫なんどビリーリーでもこるじ
やないー ほんとマイペースなんだからー！」

「なんだか調子がいいですね。ねえ、やべ、やったのだったんだよ……？」

「なんでもないわよ、猫ちゃん……。あっ、そうだ。猫ちゃんお腹すいてる? 今ね、えびせん持ってるの。たべる?」

「いやにやつ！！！この香ばしい一オイセ.....えびせん」やあん！
！ オリヤの大好物だにやん！

「わあ、ヒーハー。たんと食べてね」

うにゃーん。それではいただくにゃん。ハグツ……あれつ? にゃんだこれ? カリカリするにゃん。えびせんてふにゃふにゃするものじやにゃいの?

ベーリーがいた。やめられない……ここにいる。たゞただいま

「あらあら、そんなに慌てて食べなくてもまだ沢山あるわよ。猫ち

5

「ねえ、ねえ、悠里つたらー！ そろそろ行かひよ。もつ日が暮れるから、見られなくなっちゃうよー！」

「ハイハイ、渚ちゃん分かっていますよ。……それじゃあね猫ちゃん、私行かなくちゃ。あなたを連れて帰りたいけど、事情があつてどうしても連れて帰れないの。ゴメンね……、またね」

あーん、あーん。もつぱり？ もつじーい
あーん、あーん。もつぱり？ もつじーい
このひさん！ オリヤはおまえが気に入ったのさん。だから
いのさん。

『新編和漢書』卷之三

「ねえ、悠里ー！ 早く早くうーーー！」

いやあーん！

「またね……猫ちゃん」

あ……。行ひかせつたぢやん。わみこいのぢやん。…………

でも、これでよしとするにゃん！ だつてえびせん沢山食べられ

たにやん。

きっとこれもアイツのおかげだにゃん。カンシヤするだにゃん。

やつこ！ アイツにアイサツがてらおれを囁つてへん。 せんでも……

でも、オリヤは水の中には入れないし……。“後ろ足で歩く生き物”がいっぱいいて、川の側には近づけないようにやん。

「やんだ！ そつなのにや！ 夜中行けばいいやん。夜中なら後ひ足で歩く生き物” もいなにやん。

それまで頑張る。がんばる。がんばる。

そうじゃー！　アイツにお礼を言いた行くにゃん！

あれつ？

にや
んだか川の方が騒がしいにやん。

「いやいや……」「やんでこんな時間まで“後ろ足で歩く生き物”が沢山いるじゃん……これでは川に近寄れないじゃん……」

「おーい！見つかったか！？」

「ダメだ！ そりがはーー？」

「EJのちもだー……ぐわわわ。せつかく一般視聴者が喜びそつないこネタだつてのEJ……。EJく泣えちまつたんだ」

た、た、た、大変EJやん……。アイシが“後ひ足で歩く生き物”に狙われてるEJやん……。EJのままじゅアイシ食べべられてしまつEJやん！

いそがにやことー アイシを見つけて知らせてあげるEJやん！

水は恐いんにやけど、やつむすびついてるEJやん！ それが仁義というものだEJやん！

ハア……ハア……ハア……やつむすびついてるEJやん。EJの辺り “後の足で歩く生き物”がいにやいEJやん。

アイシこるかにやあ？

えーと……。EJやんて呼んだらこいつEJやん？ めあ、適当に呼ぶEJやん。

おーーー こいつも水の中こいる、わみしんせうの独つぼつちくへんEJやーーー こゆかのにやあ！ いたり出で来るのにやん！ オリヤ、お前にお礼が言いたいEJやん！

.....。

EJはこじりこみたこいやん。あつひ探してみるEJやん……。

「いや……？」「や！」「やああああつ――！」

「よ、呼んだべさ？ チビネコくん。……な、なんだべさ。ボクに何か用だべさ？」

「やはあー！ ハアハアハア……。イキナリ水の中から出でくる」
「やー」「やん！ びっくりしたにゃー、もつ！」

「だつて君がボクを呼んだべさ」

「やにや……、どうにやつた。じつは話があるのにゃ。まずはお礼からだにや。オリヤはおまえのおかげで大好物のえびせんを沢山食べられたのにゃん。ありがとうなのにゃん。

「なんだか分からないけど、どういたしましてだべさ。見かけによらず君つて礼儀正しいんだね。ボクはアザラシのパー太。よろしくだべさ」

「パー太くんにゃん。初めましてなのにゃん。でもオリヤは知っていたのにゃん。

「チビネコくん、君の名前は？」

「オリヤか？ オリヤにはなまえなんてにゃいにゃん。オリヤはいつも一匹ネコだにゃん。

「そりゃ、名前がないのか。それじゃボクが付けてあげるべさ。そうだ！ 『オリヤ』君てのはどつ？」

「へへへー、氣に入つてもらえたべや。お近づきのしゆしだべや」

いや、オリヤヒー太くんは今日から友達にやるの。いや。

「……友達かあ。オリヤくん。とても言いたいくらいなんだけど、ボク今田でここをお別れするだべさ」

「いや、いやなんだつて？！」

「だつてボク、おかあさんの所へ帰りたいんだもの。ボク迷子なん
だ」

そうなのにも……。せっかく友達にこもったのに。

「ごめんよ、オリヤくん。ボク、くつたらビゴー、いられないべさ。
水は臭いし、たべものはいないし。おまけに人間がボクをいじめる
から……」

「にんげん？」もしかして“後ろ足で歩く生き物”的事にやか?
……そ、そういうにゃー！ こうしてはいられにゃいにゃー。ニンゲン
とやらがブー太くんを探してるにゃん！ 見つかったら食べられて
しまつにゃん！！

「そ、そんなあ……。ボク何も悪い事してないべや。何でいじめるべさ。……しかたないべさ、今晚旅に出るべれー。」

も、アーヴィングは一 わおっこちやれが一番いやん！

「へ、うん。ボクも君と出来て嬉しかったべや。オリヤくんの事、忘れないべや」

「れしご事書つてくれるこやん。オリヤもパー太くことを忘れないこやん！ それが友達だこやん！」

「うん、ずっと友達だべやー。」

「いや……ずっと友達だこやん……」

「……こやん、誰か来るこやん！ きっと二ングンだこやん！ 早く行くのこやん！ 捕まつたらおしまこなのこやん！」

「へ、うん。でも……」

「こから行くのこやん！ ハンゲンはオリヤが引き付けておくれのこやん！」

「オリヤくん、あつがとつー、まだいかで会えるだべか？ー。」

「分からんこやん！ でもオリヤたわせずっと友達なのこやん！」

「来たこやん！ 早くだこやん！ プー太くん、元氣で行つてりしゃいなのこやん。おかあさんこ無事に会えるといこのこやん！」

「おこー、こたぞー、うひだー、アザラシがこらー。」

じゃあバイバイなのにやん！

「うん、オリヤくんも元気でね。バイバイ……」

行つちやつたのにせよ。あとで、ソーサンゲンを立候ひたるせん
一一 行くだにせん一 それつ一

シャア――ツ――！――！

「わっ！ 何だっ！ ネコがあつ！ ネコがあ！ 襲ってきた

「わーっ、機材があ！た、た、た、大切な機材が荒らされているう！わ、わ、わ、大切なディスクを噛み付いて持つて行きやがつた！！」

「捕まえろーっ！ 取り返せーっ！ ーーー！」

「まへえーつーー！」の「ボウネ」は「ボウネー」。

ハア、ハア、ハア……なのにやん。

「ソラゲンとやらせなんとかほこたのソラゲン…。

ブー太くん、無事におかあさんに会えるといいにやん……

「いや。わざと来れたにゃん。

疲れたにゃん。オリヤはまたねるにゃん。

おやすみなさいなのにゃん……。

おやすみなさいのにゃん。

わむこわむい日がこくつもひいたにゃん。

パー太くんは元氣にしてるかにゃん。

オリヤはあいかわらす、河原のせんせんだにゃん。

そういうえばオリヤのせんせ道に、パー太くんせつくりの固にやつ
がいるにゃん。

そいつは話しかけても返事をしないにゃん。

でも、パー太くんにせつくりだからいつも近くで圍ねをするにゃ
ん。

とっても気持ちがいいのにゃん。

まるでパー太くんにいるみたいだにゃん。

「にゃん」
……

「ほんにちはカワイイ猫ちゃん。あらあら、そんなに暴れないで。
なでなでしてあげるから……」

「いやにや？」「なんだかいこー オイがあるこやん。なつかしこー オイだにやん。むかしむかしだにやん……」

「あらあら、猫ちゃん。ねむこの?」せつかくえびせん持つて来たの!」

早
日
ハ
ア
レ
ビ
カ
ン
ヒ
タ
ル
の
サ
ー
ト
一
レ
サ
ー

「あらあら、そんなに慌てないで。沢山あるからたんと食べてね」

માર્ગ અનુભૂતિ

うにせ?

でむのよ、じの。さうのこ躍へじかのむか。.....。

「おーい！ 悠里い……ハア、ハア、ハア……もうっ！ どうで行つちやつたのか心配したわよー すぐいなくなるんだからー」

「おひる、」おひるさん

「ねえ、といいんだや。こんなところで何やつてんの？……あい？
なつかしーつー！…これアザラシのマタちゃんのお墓じやなーい！
！へえー、こんなとこにあつたんだ。それよりさ、五年ぶりに会
つたんだから再開を祝して美味しいケーキバイキングでも食べに行
いつよ。この辺にお勧めのカフュ見つけたんだ」

「あいあい……。渚ちゃんは食こしん坊さんね」

「ほひ、早くう！ 悠里い！ こんなアザラシのお墓しかない所で
えびせんなんか広げてないでさあ！」

「ハイハイ……。じゃあな、猫ちゃん……。お友達といつまでも仲
良くな……。それじゃあね……バイバイ」

「いや。バイバイなのに……。オリヤはもうパー太くんと、ず
つといつしょなのにや……。

終

『「」のはしわたるべからず』

『「」のはしわたるべからず』

とんち小坊主はしばし首をひねつたが、何事の不安も感じず、「」、その橋のど真ん中に足を踏み入れ、歩みを進めるのだつた。

されど、道のど真ん中ほど風当たりの激しいものはなかつた。が、それでも小坊主は時に駆け抜け、時には悠々と大手を振つてその志しを貫いた。

しかし、彼がどんなに「」を堂々と歩み進もうとも、誰もが何かを恐れるように歩み寄ろうとはしなかつた。

なぜならば、右手側の欄干らんかんを歩く人から見れば、小坊主は左側を歩むように見え、

また、左手側の欄干に沿つて歩く人から見れば、小坊主が右側を歩むように見えていたからだ。

人は二つの目を持つてゐる。がしかし、一つの物事を見るので精一杯なのだ、と彼は理解した。

小坊主はほとほと困り果て、途中で着ているものを放り投げると、橋を渡らずに川へと飛び込んだ。

川の流れに逆らいながら、ゆつくりと、ゆつくりと水の冷たさを実感し、向こう岸に辿り着くことを決心したのだ。

\leqslant

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1808e/>

短編集『ぬかにクギは打てない』

2011年10月3日17時40分発行